

# 45歳の おっさん 異世界召喚に 巻き込まれる



45sai no ossan, isekaishokan  
ni makikomareru

## 3

著者  
よっしい

イラスト:市丸きすけ



### ファート

サージュとコンビを組む謎多き冒険者。お姉さんぶるのが好き。

### サージュ

ファートとコンビを組む謎多き冒険者。探求心が強い。

### すぎうらかなえ 杉浦香苗

白河とともに召喚された怖がりなOLで、抜群の料理の腕を持つ。小悪魔っぽい一面も？

### メーネア

召喚の儀式を行った王国の王女。現在は白河に同行する。

### ガルム

十六夜に従う強力な魔狼。

### カトリーン

アークトドラゴン上位竜だが、普段は人化している。養父を倒した白河を憎む。

### いざよい 十六夜

夜叉魔族の一人。白河との戦いに敗れ仲間になったものの、何やらその後も暗躍しているようで……

### しらかわこじろう 白河小次郎

本作の主人公で、心優しき45歳のおっさん。突如異世界に召喚されるが、発現した無数のスキルで楽しく生きる。

## 第一話 極上の料理と嵐の予感

俺——白河小次郎、四十五歳のおっさんの異世界生活も、気が付けばかなり濃密なものになってきたよ。

始まりはいつもの通勤電車の中だったんだよね。

いつも通り同じ車両の同じ座席に座って、目を瞑ってうとうととしていたら、突然眩い光に包まれてさ。気が付けば見知らぬ城の大広間で尻餅をついていたわけよ。

で、そこで待っていた外国人風の奴ら、好き勝手言っちゃってさ。

フリーッシュ宰相とかいうえらそうな男が「勇者召喚に成功しました」とかなんとか、にこにこしながら言うんだ。

……おっさん、勇者ちゃんやけど。

その城の人間——インダルチャンス王国の王や宰相たちがうさん臭くてさ、おっさん、逃げ出す策を練り始めたんだわ。

たまたま近くにいた香苗ちゃんを連れてトイレに行こうとしたら、なぜか王女のメーネアちゃん

が案内すると手を上げてね。

そしてトイレで出会ったGのおかげもあって——そう、あの黒光りする皆さんののおかげで——アイテムとスキルを奪ってとんずらこくことができたのさ！

我ながら、やるじゃないかおっさん。

その後も怒涛の展開の連続だった。

商館に飛び込み『異世界売買』というスキルで日本から仕入れた品を売って資金を作って、冒険者ギルドに登録して、王国からの脱出を目指したわけ。

途中で知り合った凄腕冒険者のファートさんとサージュさんたちの助けもあって、ぐちゃぐちゃになってたおっさんのスキル表示も整理してもらえたし、なんと魔術まで使えるようになったりして。

おっさん、スキルが三十五個もあるんだよ。三十五個。

自分でもびつくりだよ、ほんとに。

そうこうしながらも無事、隣国の大都市アフェールへたどり着いたんだ。

大商人のロニーさんや、その娘のオリアナたちとも関わりができて、街外れの「ワケあり」屋敷を格安で手に入れられたりして——賑やかになってきたもんだよ、ほんとに。

で、この屋敷、日本と通信できる特殊な環境だったんだよね。

それが一番大事なことだ。書斎でだけ繋がる、百文字程度の短いメッセージのやり取り。

たったそれだけだけど、日本にいる妻のメッセージを見るたびにどれだけ救われたか分からないよ。

それから、スキルで日本から取り寄せたシャンブーやリンスや最高級キリマンジャロを売る店を開いたり、鍛冶スキルを磨いて、ミスリルとオリハルコンを使った魔剣も何本か打ったり。

おっさん、気がついたら異世界で商人兼鍛冶師になってたよ。

日本に帰るための布石なんだけどね、全部。

そんなある日、フレンドリーすぎる皇帝との邂逅を経て帝都プレジールから帰ってきたら、日本に帰るために必死で築き上げた拠点が、燃えて全部灰になってた。

何より怖かったのが、あの書斎のことだよ。

書斎があった場所に立ち、震える手でスマホを取り出して通信を試みたら、画面に映るのは無慈悲な「圏外」のマークだけ。

何度やってもエラー、エラー、エラー。

物理的に屋敷ごと燃えてしまって、日本と繋がれる唯一のアンテナが断ち切られたんだよ。

犯人は柄の悪い冒険者グループ「暁団」たちでさ、俺たちの不在を確認してから商品を破壊し、火を放って逃げた、ということだったんだよね。

そして、インダルチャンス王国が糸を引いている可能性が高いって。

もう逃げない。腹の底からそう決めたよ。

焼け残った作業場を足場に、ファートとサージュたちと仲間を集めて、罟を仕掛けることにしたんだ。

リーダーだけは手強かったけど、煙幕玉と魔術でなんとか全員捕縛。一網打尽にしてやったよ。帝都に召喚されて、「暁団」討伐の功績を認められて準男爵になってしまった。

その後、皇帝の依頼でマスイールダンジョンに潜ることになったんだ。

皇帝の庶子にしてS級冒険者のクインシー、そしてさらに二人の強烈な女性に出会うことになった。

一人目はセアリアス帝国の第一皇女エルヴィーラ。

普段は優雅なお姫様なのに、戦闘になると「死に晒せ、下郎！」とか「さっさとくたばれ、クズどもが！」とか物騒なことをさらっと言うんだよね。

しかも本人は全く自覚がない。どういう仕組みなんだ、あれ。

もう一人は夜叉魔族の舞姫、十六夜。

見た目は二十代後半の美女なのに年齢が二百八十七歳で、職業が「暗殺者・舞姫」っていうね。

物騒すぎるたる。

紆余曲折あって二人ともおっさんの仲間になったわけなんだけど、この二人が顔を合わせるたびにすぐ口喧嘩が実力行使の張り合いでね。

まあ、道中の魔物は面白いように片付いていくからいいんだけど。

ダンジョンの最深部では女神デアって人にも会ったよ。

顔とスタイルはめちゃくちゃいいのに、部屋は下着が脱ぎ散らかされ、ポテトチップスの袋が散乱した汚部屋で、本人は裸でよだれ垂らして寝てるっていうね。

本当に女神なのかな、あれ。

謎の七色に輝く珠をもらったけど、「きつといいことがある」って言い方が引かかるんだよね。「絶対」じゃないんだよ。曖昧すぎる。

ちなみに、ドラゴンも何体か討伐して、一匹平均金貨五千枚で売れたんだよね。

金貨一枚で庶民の家族が一月暮らせるって聞くから……もう計算したくない。

眩暈がするから。おっさんたち、すっかりリッチになっちゃったよ。

一番デカかった個体はそのまま収納していたから、ほぼ全部を持ち帰っている。

鱗と骨なんかは特に需要があるからと素材として手元に残してあってね、職人魂がむずむずするんだよ。

あの魔力密度、絶対に凄いものが作れると思うんだよね。

攻略を終えて、帝都・プレジールに戻ったら、皇帝陛下には「よくやった！」って褒められた。そして、なんと伯爵に陞爵しちゃったよ。子爵を飛ばして伯爵だよ。

しかも領地まで付いてきて。日本じゃ係長どまり……いや、すまん見栄はった、万年平社員で係長にすらなれなかったおっさんが、異世界で伯爵だよ。

人生、どこでどうなるか分からんもんだよな、ほんとに。

で、今おっさんは、皇帝陛下から「ドラゴンの肉、一緒に食わないか」って提案を受けてるんだよね。食べられるなら食べようじゃないか、つてなもんでさ。

……この時点では、まさかこのあとあんなことになるうとは、おっさん、これっぽっちも思っつてなかつたんだよねえ。

四十五歳のおっさんの異世界生活、まだまだ続くよ。



「うむ！ うまい！ 実にうまいぞ！ これほどの珍味、余の長い人生でも初めてじゃ！」

どこまでも高く澄み渡った青空の下。手入れの行き届いた芝生と、色とりどりの花が咲き誇る、セアリアス帝国・プレジール城内の中庭。

本来なら静寂と格式が支配するはずのその場所で、この国で一番偉いはずの皇帝陛下——エトムントが、感極まった声を上げている。

陛下のその手にあるのは、滴るような肉汁を湛えた、巨大な骨付き肉。そう、さっき俺が解体したばかりの、新鮮なドラゴンの肉だ。

ドラゴンの肉は、魔力をたっぷり含んでいるため、焼くと独特の甘い香りと、濃厚な旨味の煙を上げる。

でも、この絶品料理を作ったのは俺じゃない。

俺がドラム缶を加工して作った即席コンロの前で、白いエプロン姿も眩しい香苗ちゃんが、手際よくフライパンを振るっているんだわ。

「はい、焼き上がりましたよー！ 白河さんが教えてくれたソース、特製ガーリックバター醤油

ソースが決め手です！ きつと美味しいですよ！」

ジュウウウツ！ という食欲をそそる音と共に、香苗ちゃんが女神のような笑顔で焼き立てのステーキを大皿に盛り付ける。

彼女の持つ『料理』スキルは伊達じゃない。

ただ焼いただけに見える肉も、彼女の手にかければ、筋切りから下処理、そして火加減まで完璧に計算された、至高の一品に変わるんだよね。

焦げた醤油とニンニクの香ばしい匂いが、優雅な皇城の中庭に漂う。

完全にバーベキュー大会だよ、これ。

遠くで警備をしている衛兵たちの、喉をゴクリと鳴らす音が聞こえてきそう。

「こちらでございます、ご主人さま。一番脂の乗った美味しい部位をお持ちしました」

すつと差し出された皿。持ってきたのは、艶やかな和装に身を包んだ十六夜だ。

その所作は流れる水のように、美しい着物の裾を一切汚すことなく、完璧なタイミングで料理を運んでくれる。

「ありがたい、十六夜。気が利くなあ」

「ふふ、ご主人さまに喜んでいただくのが、私の至上の喜びでございますから。それにせっかくのドラゴンのお肉を、ガルムにも分け与えてくださっておりますもの。さ、どうぞ召し上がれ」

十六夜が涼しげに微笑む。

うーん、美人……和服美人に給仕されるドラゴンステーキ。

どんな王侯貴族も味わったことのないであろう贅沢だ。

そんな十六夜の足元で骨付きの肉をほおぼるガルム。

いや、ドラゴンの骨をバキバキ言わせながら食べるってどんな頑丈な歯をしてんだよ。

そして、反対側では……。

「あなた、ワインはいかがですか？ 王家の蔵から、一番いい年代物を出してもらってわたくしの氷魔法でよく冷やしておきましたわ」

なんと、メーネアちゃんがボトルを持って、おっさんのグラスにトクトクとワインを注いでくれる。

待つて待つて。メーネアちゃんって、元王女様だよ？ 隣国のプリンセスだった人だよ？

元王女が酌をして、凄腕の和装女剣士……というか扇子使いである十六夜が給仕をして、キッチンでは聖女のような美女、香苗ちゃんが料理を作っている。

……繰り返しですが、なんとという贅沢。おっさん、皇帝陛下よりいい身分なんじゃないか？

恐縮しつつも、目の前に並ぶ美女たちと、香苗ちゃんの絶品料理を満喫する。

おっさん、幸せすぎてバチが当たりそうだよ。



そして、この宴を陰で支えているもう一人の立役者がいた。

「はいはい、お皿が空いた方はこちらへ！ 新しい取り皿はここだよ！ あ、そのタレ切れかけてるね！ カナエちゃん！ タレ追加できる？ 氷が足りない？ すぐに持つてくるよ！」

テキパキと動き回り、食器や調味料の管理、そして全体の進行を一手に引き受けているのは、トレイナー商会の看板娘、オリアーナだ。

彼女が商会のコネをフル活用して手配してくれた高級な銀食器や、様々な稀少な香辛料のおかげで、この野外パーティーは成り立っていると云っても過言じゃない。

さすが商人、段取り力が違う。

「オリアーナさん、こちらのテーブル、岩塩をお願いできますか？」

「あいよ、エルヴィーラ様！ 北の大地で採れた最高級のピンクソルト、用意してあるよ！」

エルヴィーラが優雅に指示を出すと、オリアーナが嫌な顔一つせず、むしろ阿吽の呼吸で応じる。普通なら、皇族と一介の商人なんて、口をきくのも憚られる身分差があるはずなんだけどね。

二人は親同士の付き合いがあったことから、幼馴染として育ったらしい。

たまに二人でヒソヒソ話をして盛り上がってるし、女の友情ってやつかな。

クインシーの話で盛り上がってたりするのか？ あいつモテモテだな。羨ましいぜ！

そんな冗談はともかく、エルヴィーラと十六夜は、念のため場所を離しておいてよかった……

よな？

ダンジョンの時のように凄い剣幕で口撃しあつてはたまらんからね！

エルヴィーラの変貌も凄いいんだけどさ、十六夜の冷徹で辛らつな言葉、思わず震えてしまうよ。

まあ、はつきり言おう。美人を怒らせたらとんでもないことになる！

「シラカワ！ そなたの連れは、どいつもこいつも素晴らしいな！ 特にこの料理を作った娘、城の料理長にしたいぐらいじゃ！」

皇帝陛下が、口の周りをソースでベタベタにしながら、骨付き肉にかぶりつきつ絶賛している。威厳も何もあつたもんじゃないけど、この人のこういう飾らないところ、嫌いじゃないよ。

その隣では美人の皇妃様と……こういうのは愛人？ 第二皇妃？

たくさんの女性たちがドレス姿のままドラゴンの肉を上品に食べてるんだよね。

「だろ？ 香苗ちゃんの料理は世界一だからな。ただ、悪いけど料理長なんて無理だぞ、俺の大事なパートナーだからな」

おっさんは、皇帝相手に全くのタメ口で答える。

最初は周りの貴族や衛兵たちが「不敬だ！」って顔を真っ青にしてたけど、皇帝陛下本人が「余に気を使うな、友として話せ。敬語など使うな」って命令したんだから仕方ない。

今じゃ、このフランクな会話にも慣れてきたみたいだ。

「ちっ、欲張りな男め。だが、この味なら納得じゃ！ ……うむ、力が漲ってくるぞ！」

漲ってきたからって、城でやったように剣をぶっ放すとか勘弁してくれよ？ そんなことをしたらまた面倒なことになるじゃないか！

そんなことを考えていたんだけどさ。

あの皇帝陛下が、骨付き肉を食べながら、ふと真剣な顔になった。

「シラカワよ。一つ聞いてもよいか」

「どうぞ」

「そなた……この国に、このままいるつもりか？」

唐突な質問に、俺は少し考えた。

「どういう意味だ？」

「言葉通りの意味じゃ。そなたは元の世界に帰ることを望んでおるのか、それとも……ここに骨を埋めるつもりなのか。余は、そなたのことが気に入っている。正直に答えてほしいのじゃ」

皇帝の目は、さつきまでのはしゃいだものとは違う。じつと俺を見ている。これは本気の質問だ。

……どう答えるべきか。俺は空を見上げた。

日本には、妻子がいる。

でも、連絡すら取れなくなり、その絆はもう……いや、それとは別に、今ここにいるみんなのこ

とを考えると。

「帰れるもんなら帰りたいが、退路が絶たれちゃってるんだよな。正直に言う……今は、ここに残りたい気持ちの方が強いな。帰れるなら帰りたい気持ちも確かにある。でも、今ここにいるみんなを置いていけるかというと、それはできないよ。ただ、帰り方は今後も探していくけどさ」

この時はおっさん、自分でも意外なことに心の底からそう思っていた。

あとから思ったが、日本にいる家族に会いたい一心でここまでたどり着いたっていうのに……日本  
本の家族のところに戻ろうって意識が失せていたんだよ。そんな馬鹿な！

「……ほう」

「それに、陛下。おっさん、この世界でやりたいことが出てきちゃったからな」

「やりたいこと？」

「この世界でしか作れないものを生み出すとか、この素材で何か新しいことをやってみるとか。元の世界にいた頃は、毎日仕事に追われて、自分が何をしたいかなんて考える余裕もなかったんだよ。ここに来て、初めてそういうことを考えられるようになった気がしてな」

皇帝が、ニヤリと笑った。

「いい男じゃな、シラカワ。余は、そなたがこの国の柱になってくれると信じておるぞ」

「……買いかぶりすぎだろ」

「いや、余の眼は確かじゃ。まあ、急かすつもりはない。ゆっくりとこの空気に慣れていけばよ」

そして皇帝は、また骨付き肉にかぶりついた。

「ではまず、この肉の産地がどこか、余に教えてくれ。もう一頭タイムして育てたいのじゃ」

「ダンジョンから出てきたやつだぞ！ 牧場で育てる気か!？」

「何が悪い！ 余の城の庭が少し狭くなるだけじゃ！」

……この人、本当にスケールが違う。いい方向にも、困った方向にも。

「美味しいわねー！ さすがカナエちゃん、お姉さん感激しちゃうー！」

「……ん。美味。魔力回復効率も高い」

向こうのテーブルでは、双子のようにそっくりなファートとサージュの二人も舌鼓を打っている。彼女たちにとっても、ドラゴンの肉なんて一生に一度あるかないかのご馳走だろう。

お姉さん口調で明るい火魔法使いのファートと、無口でクールな氷魔法使いのサージュ。

二人ともダンジョンで俺たちを助けてくれた、頼れる凄腕冒険者だ。

どちらも魔力特化らしいんだが、なぜかファートはいつも剣をふるっている。

今のところサージュは普通に後方から杖を使っているが、何か怪しいんだよな。

というか、こうして黙っていたら、相変わらず見分けがつかないなあ。今度二人のことを詳しく

聞こう！

あれ？ 前にもそうしようと思っていた気がするんだけどなあ……。

そうそう、忙しくしている女性陣も、時間を見つけてはちゃんと食べている。というか俺が時々料理や配膳を代わって、その間に食べてもらっているんだけどさ。こういうのはみんな食べないと……って城の料理人に頼めばよかったんじゃないかね？ とか思ったが、いまさらだな。

それにしても平和だ。ダンジョンでの死闘が嘘みたいだ。

小鳥が囁り、風が心地よい。こういう日常、おっさん的には一番のご馳走なんだよね。

「あらあら、泥棒猫たちが囁っておりますわね。シラカワ様のお口は、わたくしが拭いて差し上げますわ。さあ、ペロ……」

「ちよ、エルヴィーラ！ ハンカチを使えっ！ 舌はやめろ！」

自称・婚約者のエルヴィーラが、相変わらずの距離感で迫ってくる。

この人、普段は淑やかな深窓の令嬢なのに、おっさんが絡むとブレーキが壊れるんだわ。

周りの衛兵たちが「見ちゃいけないものを見た」って顔で空を見るよ。

クインシーが「姉上、ほどほどにしてくれよ！」と呆れ顔で止めに入っているが、効果は薄そ

うだ。

俺は、食事も一段落したところで、腹ごなしも兼ねて立ち上がった。

中庭の隅には、解体したドラゴンの残りのパーツが置かれている。

その中でも一際異彩を放つ、巨大なドラゴンの角。

俺たちがダンジョンで最後に戦った、一番デカイ個体の素材だ。

そうそう、クインシーと話していたんだけどさ、このデカイ個体、他のドラゴンと明らかに何かが違うんだ。もちろん物理的にデカいんだけど……なんでこんなにあっさり仕留められたのか。

気になって解体中に見ていたんだけどさ。

「なあ、シラカワ、ここ攻撃したか？ なんか丸くえぐれてねえか？」

クインシーが指摘した場所、確かに俺が放った斬撃ではない、何かにごっそり持っていかれたよな、半球状にえぐれた痕があった。

「なんだろう。おっさんが放った斬撃はあくまで直線だしなあ」

「やはりそうか。もともと手負いだったのか？」

「さあ、今更考えても仕方ないさ。さ、そんなことより肉以外もどうするか考えよう」

俺はそこで会話を打ち切った。

で、改めて素材としてのドラゴンを見たんだけどね。

鈍い光を放つその角は、ダイヤよりも硬く、深い魔力を秘めていた。これをどう加工してやるのか。

削り出して杖にするか、それとも粉末にして最高級の薬にするか……俺は単なる「超一級の素材」として、それを眺めていた。

そこに情などない。あるのは、職人としての興味だけだ。

「これなら、凄い魔導具が作れそうだな……」

おっさんが職人魂を燃やしていた、その少しあとのことだった。

## 第二話 空からの復讐者と、暴走の婚約者

「あ、そこのお肉、いい焼き加減だね！ 次はそれをいただこうか！」

皇帝陛下の言葉を聞いてオリアーナが手際よく皿を差し出し、香苗ちゃんが笑顔でサーブする。

平和だ。あまりにも平和すぎる。おっさんが異世界に来てから、これほど穏やかで満たされた時間はない。

真つ青な空、美味しい料理、そして美女たちの笑顔。皇帝陛下も「余は幸せじゃ〜」なんて言い

ながら、ワイン片手に上機嫌だ。

皇妃様たちにその都度叱られているようだが、聞く気なしだな、あれ。

ああ、この時間がずっと続けばいいのに……。

俺が心の中でそう呟き、コーヒーを啜った、まさにその瞬間だった。

ズンツ……。

突如、空気が鉛のように重くなった。

まるで大気そのものが質量を持ったかのように、肌にとわりつく。

今まで聞こえていた小鳥の囀りがピタリと止み、風さえも恐怖したかのように凪いだ。

本能が警鐘を鳴らす。

——何かが、来る。とてつもなくヤバイ何かが。

「……ッ!? 陛下、お下がりを！ 全員、戦闘態勢ッ!!」

クインシーが鋭く叫び、電光石火の動きで皇帝陛下の前に立ちはだかる。

その反応速度はさすが帝国最強だ。だが、敵の接近はそれ以上に速かった。

皇妃様たちは慣れているのか、ささっと引き上げていったよ。

いや、ドレス着てどうやってあの速度で退散するんだ？

キイイイイイイン……！

耳をつんざくような高音の風切り音。  
全員が空を見上げた瞬間、遥か上空から、黄金の流星のような何かが、俺たちのいる中庭目掛けて一直線に墜ちてきた。

「な、なんだアレは!?」

「キヤアツ!」

ドガアアアツ!!

爆音と共に、中庭の石畳が爆発したかのように砕け散った。

凄まじい衝撃波が円状に広がり、バーベキュー台の火の粉と土煙を巻き上げる。

「きゃっ!」

香苗ちゃんが悲鳴を上げてしゃがみ込む。

「香苗ちゃん!」

俺は咄嗟に彼女を庇うように前に出て、飛んできた瓦礫を背中で受け止めた。

痛つてえ! 身体強化してなかったら骨折してたぞ!

ガシャーン! パリーン!

「ああっ! あたいが商会からくすねて……じゃなくて、借りてきた最高級の食器があツ!!」

オリアーナが悲痛な叫びを上げる。せつかくの料理も、ワインも、高級な皿も、すべてが土砂と

瓦礫に埋もれて台無しだ。

ドラゴンの肉の大半は食べ終えているんだけどさ、野菜とかが……もったいねえ!

そしてもうもうと立ち込める土煙。

その中心から、ゆらりと姿を現したのは——エスニック風の奇妙な服を纏った、一人の女性だった。

褐色の肌に、磨き上げられた黒真珠のように深い輝きを放つ長い髪。宝石のように美しい瞳。

絶世の美女と言つていい容姿だが、その全身からは、煮えたぎるような殺気が噴き出している。

その目は、怒りと悲しみで血のように赤く充血し、涙で濡れていた。

「……じい……じい……」

彼女の視線は、俺たちが今まさに美味しくいただいていた肉や、中庭の隅に並べられた無惨な骨に釘付けになっていた。

その唇が震え、白い歯がギリリと噛み締められる音が俺の耳にも届いた。

じい? 爺、つてことか? 誰のことだ?

彼女は、俺と皇帝陛下を、そして俺たちの皿に残った肉を交互に見て、絶叫した。

「そなたら……じいを殺したのは、そなたらかツ!」

底冷えするような声。

殺気なんて生易しいものじゃない。純粹な「憎悪」の塊だ。

「しかも、食うておったのか……。じいの肉を……笑いながら……宴の肴に……」

じいの肉？ ……まさか、このドラゴンのことか!?

ということは、この女性は、このドラゴンの家族!?

おっさんの背筋に冷たいものが走る。

俺たちは、ドラゴンを「素材」や「食材」としてしか見ていなかった。

でも、もしコイツの家族なのだとしたら……。

それは、彼女にとっては「食人」の現場を見せつけられたのと変わらない。

「余の城で何をしておる！ 無礼者めが！ ここをどこだと思っておる！」

皇帝陛下が毅然と怒鳴る。

さすがは大国の頂点に立つ者、その声には圧倒的な威圧感がある。

だが、この女性には、もはや何も届いていないようだった。

女性の殺気を感じ取ったのか、皇帝の傍にいたクインシーが、瞬時に剣を抜く。

「待ってくれ！ 誤解だ！ いや、誤解じゃないけど、話を聞いてくれ！」

俺の叫びも虚しく、彼女の身体がまばゆい黄金の光に包まれる。

バキバキバキッ、グググッ……！

骨が軋み、肉が膨張する不気味な音が響き渡る。

褐色の肌が硬質な鱗に覆われ、美しい肢体が人間のものではない形状へと変貌していく。

「許さぬ……許さぬぞ人間どもオツ!! 我が半身を弄んだ罪、万死に値するツ!!」

光が弾けた瞬間、そこにいたのは人間ではない。

黄金に輝く、美しい流線型のドラゴンだった。

……小さい？

おっさんは一瞬、拍子抜けした。

以前、ダンジョンの最深部で戦った一番デカかった個体——今「じい」と呼ばれた個体は、全長十メートルを超える山のような巨体だった。

一般的なドラゴンでも七メートルはあると聞く。

だが、目の前のドラゴンは全長五メートルほど。マイクロバスくらいのサイズだ。

ドラゴンにしてはかなり小柄だ。

しかし、次の瞬間、おっさんはその認識を改めた。

小さいんじゃない。圧縮されているんだ。

全身から放たれる魔力の密度が、あの巨大な個体と同等か、それ以上に高い。

無駄が一切ない、極限まで研ぎ澄まされた刃物のような肉体。

こいつ、ただのドラゴンじゃない。上位種の中でも、スピードに特化したタイプだ！

「そなたが……じいを殺した張本人かえ！ グルルルアアアツ!!」  
鼓膜が破れそうな咆哮。

黄金の弾丸となったドラゴンが、目にも止まらぬ速さで、おっさん目掛けて突っ込んでくる！

「みんな、下がって！ おっさんがやる！」

慌てて盾を構えながら、俺の頭は猛スピードで回転していた。

まずい……このまま城の中庭で暴れられたら、建物も人も全部やられる。

皇帝陛下も、オリアーナも、香苗ちゃんも、メーネアちゃんも全員ここにいるんだぞ！

こいつを城外に引っ張り出さないと！

「陛下！ オリアーナ！ 香苗ちゃん！ メーネアちゃん！ 戦えないメンバーは全員、城壁の上  
に避難してくれ！ ここは危ない！」

「シラカワ！ お前一人で何をする気だ！」

皇帝陛下が叫ぶ。

「大丈夫だ！ このドラゴン、おっさんに用があるみたいだから！ クインシーたちはあとからつ  
いてきてくれ！」

「危ないよ、白河さん！」

「あなた！ 気をつけてください！」

香苗ちゃんとメーネアちゃんの悲鳴が響く。

「分かった！ 行くわよ！」

オリアーナが二人の背中を押しながら、クインシーに目で合図して城壁へ向かう。

俺は盾を抱えて、城の大門に向かって全力疾走を始めた。

「こら、逃げるな人間！」

ドラゴンが怒りに任せて追いかけてくる。

よし、釣れた！ このまま城壁の外まで……！

城の衛兵たちが「何事だ！」と騒ぎながら道を開ける。

大門の跳ね橋を駆け抜け、帝都の外壁をくぐり抜け――。

たどり着いたのは、帝都の外に広がる広大な平原だった。

地平線まで続く草原。建物はなく、市民もいない。

「ここなら……思う存分やれるぞ！」

俺は振り返り、追いかけてきたドラゴンと正面から向き合った。

帝都の城壁の上に、小さな人影たちが見える。

皇帝陛下、オリアーナ、香苗ちゃん、メーネアちゃん。それに、城内から駆けつけた衛兵たち。

全員が固唾を飲んで、こちらを見守っている。  
クインシー、エルヴィーラ、ファート、サージユ、十六夜はそれぞれ俺のあとを追ってきていた……と思っていたんだが、エルヴィーラに関しては、城壁の上から、声援が風に乗って届いている……あれ？

「シラカワ様、お気をつけて！ 死んではなりませんわよ！」

エルヴィーラが遠くから叫ぶ。

いや、なんで城壁の上にいるんだ。お前も来るだろうと思ったが、まあそこで皆を守ってくれるのならそれでいいか。

「あなた、頑張つて！ 信じてます！」

「ご主人さま！ 無茶しないでよ！ あたいを未亡人にしないでよ！」

香苗ちゃんとオリアーナの声援が飛んでくる。

未亡人って、籍入れてないから違うと思うんだけど……でも、ありがとよ。おっさん、頑張るぜ！

「さあ、続きをやるうかー！」

おっさん、「防護盾」のスキルをイメージしながら、カバンから機動隊用のポリカーボネート製のシールドを取り出したんだわ。

でも、正直ビビってる。

あのドラゴン、体積は小さくても、スピードが乗った突撃は砲弾と同じだ。

直撃したら消し飛ぶぞ！

「一人で抱え込むな、シラカワ！ 相手はどう考えても上位竜だぞ！ あなたの盾だけで防げる相手ではない！」

クインシーが怒号と共に、腰に差していた大剣を抜き放ち、俺の隣に並んでくれる。

その剣は、ただの剣じゃない。

以前、俺が『鍛冶』スキルで無自覚に打ってしまった、九振りの「数打ち」の一つだ！

銘も番号もないが、ミスリルとオリハルコンを俺の魔力で鍛え上げたその剣は、所有しているだけで騎士たちの垂涎の的となる国宝級の魔剣。

刀身が青白く輝き、魔力を帯びて唸りを上げている。

「クインシー！ その剣なら通じるはずだ！」

「おう！ あんたからもらったこの剣、試させてもらおうぞ！」

クインシーが、超高速で突っ込んでくるドラゴンの鼻先に、カウンター気味に大上段から剣を振り下ろす。

「はあああッ！」

ガギインツ！

凄まじい金属音と共に、火花が散る。

普通の剣なら折れているところだが、おっさん製の魔剣はドラゴンの硬い鱗を切り裂き、鮮血を散らせた。

「グウツ……！ 人間風情が、小賢しい剣を！」

ドラゴンが苦悶の声を上げ、空中で軌道を変える。

速い！ まるでツバメのような機動力だ！

「サージュ！ 合わせるよ！」

「……ん。了解」

そこでファートとサージュの双子姉妹も追いついてきた。

全く怯む様子もなく杖を構え、左右に展開して高速詠唱を開始している。

二人の息はびったりだ。いや、実際双子かどうか知らんけど、そっくりなんだよなあ。

「行くわよ！ 紅蓮の炎よ、穿て！ フレイム・ランス！」

「絶対零度の氷よ、凍てつけ。……アイス・ジャベリン」

炎の槍と氷の投げ槍が、螺旋を描きながらドラゴンの脇腹へと殺到する。

ドガガガガツ！

爆音と蒸気が上がるが、ドラゴンは空中でクルリと回転し、最小限の動きで魔法を回避、あるいは鱗で弾いてしまった。

「嘘でしょ!? 直撃したのに無傷!？」

ファートが驚愕に目を見開く。

「……硬すぎ。シラカワ、あれは常時展開型の魔法障壁。それに、体が小さい分だけ魔力の障壁が分厚い」

サージュが冷静に分析するが、その表情にも焦りの色が浮かぶ。

「サージュ、援護して！」

ファートが飛び出しドラゴンに切りかかっていった。

で、サージュは後方から杖で魔法をぶっぱな……しはせず、杖でドラゴンを殴っていたよ。

え、いや、その杖、物理いけるのか？

だがあまり効いていなさそうだ。

「小細工など！ 吹き飛ばえッ！」

ドラゴンが苛立ちまぎれに、鞭のようにしなやかな尾を振り回す。

空気が圧縮され、不可視の衝撃波となって俺たちを襲う。

「ぐわっ！」

おっさん、盾で防いだけども数メートル吹き飛ばされちゃったよ。  
軽いからこそ、手数が多くて厄介だ！

このままじゃ、俺たちがやられるどころか、帝都ごと火の海にされかねない！

その時だった。俺の背後から、凍りつくような、それでいて煮えたぎるような、異質な殺気が膨れ上がったのは。

「……シラカワ様に、傷を……？」

いつの間にかこっちにやってきていたらしいエルヴィーラが、ゆらりと前に出た。

城壁から下りてきて、平原まで追ってきていたようだ。

優雅なドレスの裾は草と土で汚れ、自慢の縦ロールも乱れている。

だが、その表情はいつものお姫様スマイルではない。

瞳孔がカッ開き、口元が三日月のように歪んだ、まさに「修羅」の顔だった。

……いや、なんで来てるんだ。城壁の上で皆を守ってくれてたと思っていたのに。

まあ、エルヴィーラに「そこで待っていてください」が通じると思っていた俺が馬鹿だったな。

そして、その手には、俺がダンジョンへ行く時に渡した剣が握られていた。

レイピアではない。装飾は女性向けに優美だが、刀身は実戦的な強度と切れ味を追求した「細身の剣」。

これもまた、俺が無自覚に打ってしまった九振りの魔剣の一つだ。

ピンクがかった刀身が、主人の殺気に呼応して禍々しく脈動している。

「わたくしの……わたくしの愛するシラカワ様に、その汚らわしい牙を剥くとは……」

ヒュンツ、と彼女が剣を構える音が、戦場に異様に響いた。

その音を聞いた瞬間、おっさんの本能が告げた。あ、ドラゴンよりこっちの方がヤバいかも。

「下等生物ごときが、調子に乗るんじゃないやあ、おっさんよオオオツ!!」

完全にスイッチが入った。ヤンデレ・バーサーカーモード全開だ！

「グルアツ!!」

ドラゴンがブレスを吐こうとした瞬間、エルヴィーラが人間業とは思えない速度で懐に飛び込んだ。

その速さ、まさに閃光。小柄なドラゴンのスピードに完全についていつている！

「死に晒せええええツ!! この泥棒猫が！ いや、泥棒トカゲがあツ！」

「シュシュシュシュツッ！」

エルヴィーラの剣速が速すぎて、剣先が銀色の霧のように見える。

おっさんが精魂込めて打った魔剣の切れ味と、エルヴィーラの重すぎる愛が合わさり、とんでもない攻撃力になっている！

尋常ではない硬度を誇るドラゴンの鱗に、一点集中で何十発もの突きが叩き込まれる。

「これはシラカワ様からいただいた、愛の結晶ですわ！ その薄汚い体で味わいなさい！」

「グウツ……！ な、なんじゃこの人間は……!? 剣が……障壁ごと鱗を突き抜けてくるぞ!」

さしものドラゴンも、その恐ろしいまでの気迫と魔剣の威力にたじろいだ。

鱗の隙間から血が噴き出す。

「オホホホ！ どうしました？ その程度ですか？ シラカワ様への愛の前では、貴女など路傍の石ころですよ！ 踏まれて碎けなさい！ 挽肉になりなさい！ わたくしとシラカワ様のためにチリとなれええッ!!」

怖っ！ おっさん、マジで引くわ！

愛が重い！ 物理的に重い！

普段のお嬢様口調とのギャップが凄すぎる。敵であるはずのドラゴンに同情しそうになるよ。

「じよっ……常軌を逸しておる……!!」

人間の言葉でそう漏らしつつ、ドラゴンが翼を広げて空へ逃れようとする。小柄な体躯を活かした急上昇だ。

地上にいるのは危険だと判断したらしい。賢明な判断だ。

地上にはエルヴィーラという名の災害がいるからな。

「逃がすかよ！」

クインシーが叫ぶ。

「総員、翼を狙え！ 奴を飛ばすな！」

「ご主人さま、隙ができました！」

十六夜が、戦場の混乱などど吹く風といった涼しい顔で、舞うように扇子を広げる。

彼女の手にあるのは、俺が和紙と特殊合金で作った『鉄扇・月読』だ。

「夜叉流奥義・鎌鼬・乱れ咲き！」

十六夜が扇子を一閃させると、無数の真空の刃が発生し、ドラゴンの翼の付け根——鱗の隙間の薄い皮膚を正確に切り裂いた。

「ギャツ!？」

ドラゴンの体勢が崩れ、飛翔が中断される。

「今ですわ！ 落ちなさい！ 地面に這いつくばって、シラカワ様の靴の裏でも舐めさせてもらいなさいッ！」

エルヴィーラが地を蹴って跳躍し、空中のドラゴンの脳天に、渾身の力を込めた踵落としを見舞った。

ドレス姿でなんてはしたない！ でも強い！

ドゴオオオオンッ！

巨大なドラゴンが、もつれるように地面に叩きつけられる。

五メートルの巨体でも、エルヴィーラの愛の一撃には耐えられなかったようだ。

「グオオオッ！」

ナイスだ、みんな！

特にエルヴィーラ、言ってることは放送禁止レベルだけど頼りになりすぎる！

「今だ！ おっさんスペシャル・セット、喰らえ！」

俺はアイテムボックスから、例のブツを大量に取り出した。対「晁団」戦で猛威を振るった「超強力粘着シート（業務用・改良版）」と、象が引つ張つても切れない「強化ゴムロープ」だ。

日本製の害虫駆除グッズの原理を、異世界の魔法で極大化した、おっさん自慢の捕獲アイテム！

「行けえええッ！」

ドサササッ！

落下地点一面に敷き詰められた粘着シートの海に、ドラゴンの巨体が突っ込む。

ベチャッ！！

又チャア！！

凄まじい粘着音が響く。

「な、なんじゃこれは!? 足が……離れぬ!? 粘つくぞ!」

ドラゴンが嫌悪感と焦りで暴れるが、小柄な分、全身がシートに搦め捕られていく。

「今だ！ 十六夜、クインシー！ ロープだ！ ぐるぐる巻きにしちゃえ！」

「承知！」

「任せろ！」

俺たちが四方八方から投げたゴムロープが、ドラゴンの手足と口を複雑に縛り上げる。

ゴムロープの伸縮性がドラゴンの怪力を吸収し、粘着シートが自由を奪う。

現代日本の科学が生んだ拘束具、異世界のドラゴンにも効果抜群だぜ！

「グググ……卑怯な……人間どもめ……。誇りはないのかえ……」

ドラゴンが悔しそうに唸り、ついに身動きが取れなくなる。

その目からは、殺気と共に、大粒の涙がこぼれていた。

……あの涙は……。

おっさんは、止まった。それは怒りや憎しみの涙じゃない。

もっと深い、もっと痛い何かが、あの金色の目からこぼれている。

じいさんのことを思い出しているのか。

それとも、長い時間の中で積み上げてきた何かが、今この瞬間に崩れているのか。

この子、本当は……ただ悲しんでいるだけなんじゃないか？



「ふうー、ふうー……」

エルヴィーラが、荒い息を吐きながらドラゴンにトドメを刺そうと、愛剣を振り上げた。

その目はまだ血走っているし、髪は振り乱れ、ドレスは泥だらけだ。

普段の優雅な令嬢の面影はどこにもない。そこにあるのは、愛に支配されたバーサーカーの表情だ。

「ふふ……シラカワ様を害する害獣は、駆除、駆除ですわ……。首を刎ねて、剥製にして差し上げます……」

「待ってくれ！ エルヴィーラ、殺さないでくれ！」

俺は慌てて彼女の前に立ち塞がり、その肩を掴んだ。

ここでドラゴンを殺せたら、後味が悪いなんてもんじゃない。

「なぜですか、シラカワ様！ このような害獣、生かしておいては……また貴方を襲いますわ！」

「彼女とは、話がしたいんだ。頼む、剣を収めてくれ」

俺が真剣な目で見つめると、エルヴィーラの激情がふっと消え、頬がポツと赤く染まった。

「はう……シラカワ様のお願いとあらば……。わたくし、愛の奴隷になりますわ」

そう言つて、彼女はその場でへなへたと座り込んだ。

ふう、なんとか止まった……。本当に心臓に悪いよ、この人。

俺は、身動きが取れなくなったドラゴンの前に歩み出た。

粘着シートとゴムロープで雁字搦めにされた黄金のドラゴンは、悔し涙を流しながら俺を睨みつけている。

「……殺せばよからう。辱めを受けるくらいなら、いつそ殺せ……」

ドラゴンが呻くように言った。その声には、深い絶望と、何か大切なものを失った悲しみが滲んでいた。

どうする？ やはりこのまま殺すか？ いや、それは……。

その時だった。音もなく、俺の背後に十六夜が立った。

「ご主人さま」

「うわっ、十六夜か。びっくりさせるなよ」

「失礼いたしました。……ご主人さま、ご提案がございます」

十六夜は、拘束されたドラゴンを冷ややかな瞳で見下ろしながら、扇子で口元を隠して囁いた。

「このドラゴン、ただ殺すには惜しい素材……いえ、戦力でございます」  
「戦力？」

「はい。先ほどの動き、そして魔力の密度。間違はなく上位竜の中でも上位の個体。これを従えれば、ご主人さまの力となりましょう」

十六夜の目が、伶俐な光を帯びる。

彼女の職業は暗殺者だ。感情に流されず、常に俺にとって最大の利益となる選択肢を提示してくる。

「従えるって……タイムしろってことか？ でも相手は上位竜だぞ？ おっさんのスキルでいけるのか？」

「いけます」

十六夜が断言した。

「今、相手は、心身ともに弱りきっております。それに、先ほどの言葉……『じい』と呼ぶ存在への執着。その心の隙間に入り込めば、あるいは……」

「心の隙間……」

「ご主人さまの『タイム』スキルならば、相手の魂に直接触れることができるはず。試す価値はございます」

十六夜の言葉には、不思議な説得力があった。彼女が言うなら、できる気がする。

「分かった。やってみよう」

「ご武運を。私が背中をお守りします」

俺はドラゴンの巨大な頭部に近づいた。

ドラゴンは警戒して唸り声を上げるが、俺は構わずその眉間に右手をかざした。

「……人間、何をする気なのじゃ！」

「悪いようにはしない。ただ、あんたのことを知りたいだけだ」

俺は目を閉じ、意識を集中させた。

十六夜のアドバース通り、心の隙間——このドラゴンが抱える悲しみの源流を探るように。

「タイムッ!!」

俺の魔力が、ドラゴンの精神障壁を突破し、その奥底へと流れ込む。

ドクンッ！ と心臓が跳ねるような感覚。

その瞬間、おっさんの意識は、急速に深い闇の底へと引きずり込まれていった。

……え？ なにこれ？ おっさんの頭の中に、誰かが語りかけてくる？

真つ白な精神世界。

そこに、一つの巨大な影が浮かび上がった。

『……強き者よ。我が最期を看取つた者よ……』

その影が実体を持つ。見上げるような巨体。古木のようにゴツゴツとした威厳ある鱗。

間違いない。こいつは、マスーイルダンジョンの最深部で俺たちが死闘を繰り広げた、あの巨大なドラゴン——俺たちが食って、素材にもしようとしていたドラゴンだ。

「あんたは……あの時のドラゴンか？」

その声を耳にした瞬間、俺の中に言いようのない感覚が広がった。

怖い、ではない。申し訳ない、でもない。

強いて言えば……なんだろう、「会えてよかった」に近い感情だ。

『……恨みはない。強き者に敗れ、糧となるのは竜族の理。我が命運はあそこで尽きた。それはよい』

ドラゴンの声は重厚で、しかしどこまでも穏やかだった。

死してなお、その魂の一部が素材に宿り、あるいはこの黄金のドラゴンの記憶の中に生きていて、俺に語りかけてきているのか。

……あんた、あの戦いで本当に力を出し切っていたのか？

あとから思ったが、手負いだったんじゃないのか？

おっさんも必死だったけど、あんたも必死だった。

あんたが手負いじゃなければ、勝てたかどうか。

俺は言葉に出さずにそう思った。

でも、なぜか向こうに伝わった気がした。じいが、かすかに目を細めたから。

『だが……残された姫を……カトリーンを、頼みたい……』

「カトリーン？ さっきの小さいドラゴンのことか？」

『小さい……ふふ、そうじゃな。あやつは、むしろ竜族の中でも特に小さく生まれた。だが、その分誰よりも速く、誰よりも優しい』

おっさんの頭の中に、映像が流れ込んでくる。それは、この老ドラゴンの記憶だ。

千四百年もの昔。

親とはぐれた小さな黄金の幼竜を拾い、不器用な手つきで育てる老ドラゴン。

「じい、じい！」と甘えて背中に乗り、大空を飛ぶ幼竜。

人間の姿になる練習——変身魔法がうまくいかず、尻尾だけ残って泣いている少女。

それを慈愛に満ちた目で見守る老ドラゴン。

百年、二百年と時が過ぎても、二人の間にある空気は変わらない。

カトリーンが大人びた容姿になっても、じいの前では「じい、じい」と駆け寄ってくる無邪気な子供のままだ。

そして、その都度じいは「やれやれ」と言いながら、大きな体で優しく包んでやっている。本当の親子とは違う。でも、家族だ。それ以外の言葉が見つからない。

……なんてこった。こいつら、本当に家族だったのか。

『あの子は強いが、寂しがり屋じゃ。わしがいなくなれば、世界を呪い、孤独に狂うてしまうかもしれない……。いや、すでにそうなりかけておったな』

老ドラゴン——カトリーンが「じい」と呼んだ存在が、悲しげに目を伏せる。

『人間よ。いや、我が肉を食らい、我が力を継いだ強き者よ。厚かましい願いとは承知しておる。だが……どうか、あの子を導いてやってはくれぬか』

おっさんの目から、不覚にも涙がこぼれ落ちた。

俺だって、日本に愛する子供たちがいる。

もし自分が死んで、子供が置き去りになったら……。

自分の代わりに子供を守ってくれる誰かを探して、成仏なんてできずに彷徨うかもしれない。

その親心、痛いほど分かるんだわ。

「分かったよ、じいさん。あんたの想い、確かにおっさんが受け取った」

おっさんは、幻影のじいに向かって力強く頷いた。

「カトリーンは、おっさんが守る。あんたの代わりに、いや、あんたと一緒に、彼女が笑顔で生き

られるようにするよ。俺の命に代えてもな」

『……感謝する……。やはり、お主に負けてよかった……。真の強き者よ……』

じいの幻影が、満足そうに微笑み、光の粒子となつて崩れていく。

『我が身、我が鱗……好きに使うがよい。願わくは、姫の護り手として……命を全うさせてほしい……』

光が弾け、俺の意識は現実へと引き戻された。

「……はっ！」

気がつくど、俺は膝をついていた。

タイムは成功したようだ。俺と黄金のドラゴンの間に、確かな魂のパスができています。

そして目の前では、拘束されていたドラゴンが、眩い光に包まれていた。

「……じい……」

光が収束する。ドラゴンの巨体は消え、そこには一人の人間の女性が、糸が切れたように倒れていた。人間化したのだ。

そして——。

竜化する際に衣服が弾け飛んでしまったのだろう。彼女は、生まれたままの姿だった。

夕日を浴びて、黄金のように輝く肌。引き締まったウエストから、なだらかに広がる豊満なヒップライン。そして、形のよい胸。

長い青みがかった黒い髪がわずかに身体を隠しているが、その肢体はまさに「竜の女神」と呼ぶにふさわしい、神々しいまでの美しさだった。

「……ッ!!」

おっさん、不覚にもその美しさに目を奪われてしまったよ。

いや、男なら仕方ないよね？ 不可抗力だよな？

こんな状況だけど、本能が反応しちゃうんだわ！

うわ、凄いな……。直視しちゃいけないけど、目が離せない……！

なんだあの完璧なプロポーションは！ モデル？ いや、それ以上だ！

おっさんの理性が吹き飛びそうになり、鼻の下が伸びかけた、その時だった。

バサッ。

一瞬、視界が遮られた。風のような速さで何かが舞い、カトリーンの裸体を覆い隠したのだ。

「ご主人さま、目の毒でございます」

冷やかな、絶対零度の声。

十六夜だ。

彼女はいつの間にか、上質な絹の布（どこから出した!?）をカトリーンにかけていた。

その手際たるや、まさに神業。

「あ、ああ……ありがとう、十六夜。助かったよ」

いろいろな意味でマジで助かった。

「ふふつ。ご主人さまったら、お顔が赤いですわよ？ ……それに、鼻の下も伸びていらつしやい

ました。あとで扇子で叩いて差し上げましょうか？」

「ヒイツ！ 冗談だよね!? その扇子で叩かれたら首が飛ぶから！」

十六夜がジト目で俺を見る。

うぐつ……。十六夜には敵わないな、本当に。

あと、ちよつと嫉妬してる？ もしかして？

布をかけられたカトリーンが、薄く目を開ける。その瞳は、まだ夢現のようだ。

「……そなたから……じいの匂いがする……」

彼女が俺を見つめる。

さっきまでの憎悪はない。あるのは、すがるような弱々しい光だ。

「ああ。じいさんから、言われたよ。カトリーン……あなたを頼むってさ」

俺が名前を呼ぶと、彼女は驚いたように目を見開いた。

「……じいが……？ ……なぜ、妾の名を……？」

「じいさんの思念が教えてくれたんだ。あんたの名前も、二人の思い出も。あんたがどれだけじいさんに愛されていたかも、全部な」

俺は頭の中で見た記憶を、ゆつくりと話し始めた。

幼い頃の話。じいさんの背中に乗って空を飛んだ話。変身魔法がうまくいかなくて、尻尾だけ出たまま泣いていた話。それを、じいさんがくすくす笑いながら見ている話。

「……そうか……。じいは、最後まで妾のことを……」

カトリーンが、布を抱きしめながらポロポロと涙をこぼす。

「変身がうまくいかなくて泣いていた頃のことまで……まだ、覚えていたのかじい……」

涙声の中に、懐かしそうな笑いが混じった。

「あの頃、本当に悔しくてな。なぜ妾だけうまくできぬのじゃ、と」

「へえ。いつ頃から変身できるようになったの？」

「三百年目くらいじゃ。遅いじゃろ？ じいがずっと練習に付き合ってくれた」

俺は、黙って彼女の頭を撫でた。

その髪は、ドラゴンの鱗のように硬いかと思ったら、驚くほど柔らかく、温かかった。

……しかし、三百年間、練習に付き合ったのか。

じいさん、凄いい親父だよ。

「……妾は……そなたに従おう。じいの遺志……無下にはできぬ」

彼女は涙に濡れた顔を上げ、俺の目をまっすぐに見つめた。

そこには、竜族としての誇りと、新たな主への忠誠が宿っていた。

そして、少しだけ——ほんの少しだけ、ほっとしたような表情も。

「ああ。よろしく、カトリーン。一緒にやっつていこう」

俺は手をカトリーンに差し出す。

「……うむ。よろしく頼む、主よ」

カトリーンが俺の手を握り返した。

その手はまだ少し震えているが、しっかりとした強さがある。

しばらくの沈黙のあと、カトリーンがぼつりと言った。

「主よ……一つ聞いてもよいか？」

「なんだ？」

「そなた……妾が、怖くないのかえ？ 上位竜を一人で従えて、平然としておるが……」

おっさんは少し考えた。

怖くない、と言えば嘘になる。この子が本気を出したら、おっさんだって相当きつい。